

# 女性の周縁化を覆す＜アジア女性史＞へ

図書新聞 2433号 1999年1月30日

『日本女性運動資料集成』全10巻+別巻刊行によせて  
女性の周縁化を覆す＜アジア女性史＞へ  
大越愛子 VS 藤目ゆき 司会・構成 大橋由香子

—— 鈴木裕子さん編集の『日本女性運動資料集成』全10巻につづいて、別巻『総目次・人名事典・索引』が98年12月に出て、ついに完結となりました。きょうは、「女性・戦争・人権」学会の発起人として戦争と性暴力の問題に精力的に取り組んでいる近畿大学教員の大越愛子さん、『性の歴史学』（不二出版）で97年度山川菊栄賞を受賞した大阪外国語大学教員・藤目ゆきさんに、この資料集の意義についてお話しいただきます。実は私も資料集を読みながら「女のからだへの国家管理と優生思想」について書いたのですが（近藤和子編『性幻想を語る』三一書房）、研究者にかぎらずフェミニズムに関心を寄せるすべての人の財産だろうと思います。最初に、資料の具体的な紹介も含めて、藤目さんからお願いします。

藤目 私は女性運動の歴史に関心をもって勉強を始めた者なので、こういう資料集が出るのはとてもありがたいことです。ドメス出版の『日本婦人問題資料集成』が出てから20年以上たったわけですが、資料を編む側の視線も深まっているのを感じます。

1999.1.3 付  
図書新聞

THE BOOK REVIEW PRESS  
図書新聞 2423号  
1999年1月30日(土曜日)  
定価 240円 (本体220円)  
1冊の  
約

『日本女性運動資料集成』全10巻+別巻刊行によせて  
女性周縁化を覆す＜アジア女性史＞へ

大越愛子 おおごし あいこ  
1946年生まれ。哲学・宗教学・女性学専攻。主書、『フェミニズム入門』（筑摩書房）『近代日本のジェンダー』（三一書房）『闘争するフェミニズム』（未来社）『女性と宗教』（岩波書店）

今回、産児調節運動や、売春をしている女性の側の運動など、従来の女性史の見方からは入ってこなかったセクシュアリティに関する資料が意欲的に取り入れられていることが何よりもうれしいし、これからの研究に使わせていただけます。

もうひとつ、植民地と日本という着眼点をはっきり出ている点も大きい。9巻に「植民地下の娼婦運動と『接客婦』のたたかい」として、朝鮮、台湾、「満洲」、樺太での資料が、3巻には「在日朝鮮女性運動」が入っています。原文は朝鮮語のものを、日本語に翻訳して収録された資料もある。日本史研究者が朝鮮語を習得して資料を読むことは、なかなかできなくて目の前にある資料も読めなかったので、うれしいですね。今までは李順愛（イ・スネ）さんや、宋連玉（ソン・ヨノク）さんなど、在日の女性研究者の成果を見せていただくしかなかったのが、直接アプローチできます。

**大越** 第3巻には、帝国主義への抵抗運動として、天皇制に抵抗した管野すが、金子文子の軌跡、非常時共産党のハウスキーパー問題、在日朝鮮女性運動などが入っています。警察による女性共産党員の訊問調書、「赤い女」「赤い妖花」などとスキャンダラスに描く当時の新聞報道など、体制側の資料からは、すさまじい女性差別が読み取れる。当事者の書いたものと、それら体制側の資料とを編者の鈴木さんは実にバランスよく配置しています。

これによって、反体制運動として美化されてきたものに内包されていた問題が浮かび上がってくる。ハウスキーパー問題はその象徴ですね。それから、管野すが、金子文子、長谷川テルたちは、あれだけ果敢に闘ったけれど、男性たちとの関係でしか論じられない傾向にあり、彼女たちが提起した問題がはたして受け止められたのか、考えさせられました。

全体を通して3つの点に注目したいですね。

70年代の女性史が、エリート女性の運動を中心に描かれていたのに対して、労働運動や公娼制度の現場、植民地の女性など、女性差別と帝国主義体制の抑圧の中で苦しみ、そこで立ち上がった当事者の女性たちの声が資料として編纂されていることの意味が大きい、それが一つです。

二つめに、日本一国内だけでなく、アジアの中での女性運動というふうに視点を広げていることが、これからの女性史研究や近代日本のコロニアリズム、ポストコロニアリズムの問題を解明する上で意味があると思います。

三つめに、構成の仕方をみていくと、現在の鈴木さんの運動の視点と重なっていることがわかります。戦前の女性たちの善意を口実とした娼婦運動や、母性主義に基づく国家への一体化が、いかに権力に利用されていったかということへの痛烈な反省が感じられます。現在、従軍「慰安婦」問題に関して、アジアと連帯しながら果敢に闘っている女性運動に対して、日本のフェミニズムは華やかな論争はしているけれど、「女性のためのアジア平和国民基金」に対してもきちんとした態度を示し得ていない状況にあります。そのことと、戦時中の平塚らいてうたちがフェミニズムという点は打ち出しても、女性運動のある層の声には応えなかった歴史の事実とが、鈴木さんには重なって見えるのではないかと。彼女の無念な思いが、この編集に反映されているように見えます。

—— 廃娼運動については、第8巻、9巻の「人権・廃娼」で1880年代末から戦時期までを丁寧に追い、婦人矯風会を中心にした廃娼運動が、当事者の売春婦たちをどのように捉えてきたか、またそれが純潔報国運動になっていく過程が明らかになっています。「醜業婦」という言葉に象徴的な廃娼運動の問題点については、藤目さんが『性の歴史学』で解明されていますね。

**藤目** 廃娼運動における「醜業婦」観ということへの指摘が、これまでになかったわけではありません。「婦人新報」と「廓清」が復刻されているので、事実としては知られていた。ただし、それが女性史の中で、どういう意味をもつのか位置づける作業は、弱かったように思います。

どんな運動でも、何らかの限界は常にあるわけです。どんなりっぱな人格にも欠点はあるように。そういう意味で、廃娼運動の「醜業婦」観も「それは時代的制約で、いたしかたないことだ」と片付けられていた。それが、今回のような大きな資料集の中で、一方で娼妓の闘争や植民地の接客婦の資料とともに配置されると、醜業婦観の限界が、単に時代の制約一般でもなければ、誰にでも欠点はあるといった類の問題ではないことが浮き彫りになってくる。つまり、ある物事を捉える全体性において、致命的な問題だということが、この資料集成によってはっきりすると思います。

**大越** 数多くある資料から、「これだ」と編者である鈴木さんが選んで、「歴史とは何か」と問い直しているわけですね。従来、不可視にされていた歴史的事実に光をあてることで、新たな問題提起をされています。

鈴木さんに対しては、歴史実証主義とか、あるいは女性史の古典的パラダイムにとどまっていて、フェミニズム以降のパラダイム転換を生かしていないといった批判を、上野千鶴子さんが『ナショナリズムとジェンダー』（青土社）などでしています。なぜ反論しないの？と鈴木さんに聞いたことがあるんです。すると、「自分の仕事で反論していきたい」とおっしゃっていました。彼女の答えが今回の資料集成だと感じました。

**藤目** 歴史学が女性運動に貢献できることはたくさんあるというか、歴史認識がないところで運動はできない。アカデミックな歴史学以前に、自分の母や祖母たちの世代はどうやってきて、私たちはどうしようとしているのか、その認識がなくては始まらない。

上野千鶴子さんの言い方だと「フェミニズムと女性史の不幸な出会い」となるんだけど、歴史学で仕事を重ねてきた人は、新しいフェミニズムやパラダイム変換という発想をなかなか受け入れられない傾向は確かにあります。逆に、フェミニズムを中心的に担ってきた人は、社会学や文学や哲学の人で、歴史ということにわりと疎かったりする。現象としては確かに不幸な出会いです。

歴史学という学問領域は、ほかの学問にくらべて、パラダイム変換という発想から遅れるんです。実証科学ですから、理論的に「こうだ」と内心で思っても、それが具体的な史実に照らしてどうなのかという検証作業にすごく時間がかかる。歴史研究者は、百、千、万の史実の中から、資料的に検証できること一つしか出さない。地道で時間がかかる検証作業がないところで、宙に浮いた理論を出しても、根っこがないと感じるわけで

す。歴史学に自分の居場所をおいて、女性運動にもかかわっていききたい、という私にとって、鈴木さんはいつも勇気づけられる存在です。新しいパラダイム・新しい視点とともに、具体的な歴史事実が提示されることで、力強い女性運動をつくっていただけるのだと思います。

**大越** なるほどね。私は「未来」98年12月号にも書いたように（「思想系学会と『慰安婦』問題」）、最近、哲学や倫理学や思想系のいろんな学会に積極的に参加して、女性の視点が欠けていると異議申し立てをしています。ヘーゲルやカントに明確な本質主義的ジェンダー観があるという例をあげますが、具体的な発言をあげつらうよりも、彼らのこのような差別的言説を自然的なものにみせていた、当時の知のパラダイムとは何なのかと問題提起しています。けれど、なかなか理解されない。柔軟な知性が必要ですから。

それに比べると、ジェンダーの視点からパラダイム全体を揺るがすような膨大な資料がこれだけたくさんあるのに、歴史学はなぜ発想の転換ができないのか（笑）、不思議なんです。

**藤目** それはまさに、事実が膨大だからです（笑）。膨大な資料をどう整理するかが歴史で、重箱の隅をつつくような基礎作業が不可欠になる。解釈や評価がない中立的な「誰がどう見てもこれが事実」を証明することこそが歴史家の値打ちだと言う人もいます。

私は『性の歴史学』を書いた時、けっこう大人しく書いたつもりだったんですが（笑）、あれでも歴史学の世界では、自分の問題意識に引き寄せて書き過ぎている、と非難する人もあるわけです。

**大越** 資料をふまえた上で、しかも女性の視点を打ち出していて、これぞ女性史だと私は思いましたけど……。

**藤目** そう言われるのはありがたいのですが（笑）、歴史学の体質があるんです。社会学をはじめ、理論でパッと斬る人たちの言い方に「なにを根拠にそれを言うのか」と疑問を抱いてしまうのが歴史研究者なんです。そう見れば面白いだろうけど、でも何年の何月何日の、あの事件はどう見るのかしら、という歴史学固有の発想があって、うかつに言えないというか、非常に大人しくなっちゃう。

でも、そこにとどまっていたら不幸なわけで、女性学や女性運動には学際性が求められるし、学際的でないと発展しない。それをいかに具体化していくか考える上でも、今回の資料集成は手がかりを提供してくれます。